

江戸時代の相浦谷

江戸時代には、中里一帯が相浦谷を治めるの中心地となっていました。そのため、藩の役所である「⁹相神浦筋郡代役所」が中里に置かれ、年貢の取り立てや裁判などを行っていました。そして、山口村（現在の相浦）、新田村、中里村、皆瀬村、大野村、柚木村、里美村の村々には庄屋がいて、村を取り仕切っていました。

9 相浦の古い地名は、「相神浦」と書き「あいのうら」とも、「あいこうのうら」とも呼ばれていた。15世紀の室町時代から現れ、江戸末まで使われる。しかし、当時であっても相浦と書く場合もある。



半坂(八ノ久保町)

また、平戸往還（街道）が相浦川に沿って通っていました。田平を出発して江迎、佐々を抜けた平戸往還は、半坂（八ノ久保町）を越えて中里に入ります。中里には宿場が置かれていて、本陣（殿様の宿）もここにありました。中里を抜けた往還は相浦川を上り、大野地区の左右宿を経て、堺木から佐世保宿（今の元町付近）へ向かいました。

江戸時代の初めには、山間部の開拓も盛んだったようです。柚木地区の筒井町には、その頃に荒地を切り開き、田畑に変えた手光一族の墓地があります。すでに、相浦川の低地から中流域の川沿いの低い場所は開発し尽くされていたため、山間部を開墾して土地を求めたのです。

斜面を造成して棚田に変え、水を引いて田とした当時の人の苦労ははかりしれません。

また、矢峰地区の淀姫神社には豊作を祈って、前年に収穫された稲藁で神社の大注連縄を作り替える「ヤモード祭り」が伝わっています。この行事は冬の間、山に帰っていた田の神様を、田植え前に里に迎えるために行われるお祭りで、「ヤモード」とは「山人（やまうど）」が詭ったものと考えられています。祭りを司るのは「ヤモード」と呼ばれる青年2名で、鳥居の上にはヤモードだけが上ることを許されています。

毎年1月26日に、矢峰、松原両町から人々が集まって行われていて、江戸時代の風習を現代に伝える行事として、長崎県の無形民俗文化財に指定されています。



ヤモード祭り

コラム～手光一族の墓地～

斜面地のなかの小高い丘に10基ばかりの墓がある。自然石を方形の壇に積み、やはり自然の平らな石を墓標としたもので、うち1基に寛永6年(1629)の銘がある。戒名や俗名などは彫られていない。

手光家は宗家松浦氏の家臣団に名が見える。もしかしたら、1615年(元和元)の一国一城令で、宗家松浦氏が相浦の飯盛城を破壊して今福に移転するとき、そのまま残って筒井の開拓に入り、百姓となったのかもしれない。

墓地は後世の墓との混合がなく、当時のままに保存されている。また、墓地の真ん中にはヤマモモの大木があるなど大変良い環境を保っており、江戸時代初めの開拓(新田開発)の歴史を伝える貴重な遺跡である。



手光一族の墓地(筒井町)



日野の塩田跡

相浦川河口付近の日野地区では、1650年(慶安3)に播州赤穂(兵庫県)から迎えた7家族に平戸藩が土地を与え、塩作りを行わせていました。今でも道路工事のときに塩水を煮詰めたあとの灰が出ることもあり、塩釜や釜屋敷の地名も残っています。

日野の製塩は、鎖国によって貿易が禁止されたため、新しい産業を興そうと藩が塩作りの人達を移住させたものと考えられます。

戦国時代が終わり、新しい徳川幕府の時代へと世の中が大きく変動する中で、一般の人々も時代の流れに翻弄され、新天地を求めた様子を佐世保地方でも見ることができるのです。

せきたん しんでんかいほつ 石炭と新田開発

佐世保を含む北松浦地方には、かつて、たくさんの炭鉱がありました。1960年頃までには全て閉山してしまいましたが、石炭は、石油や天然ガス、そして原子力のエネルギーに代わるまでは木材より優れた燃料だったのです。

江戸時代に石炭は、主に製塩用の燃料として掘り出されています。19世紀の初め頃、相浦の芥藤松五郎は塩を手広く取引する一方で、小佐々の大瀬、長浦の炭鉱開発を行いました。炭鉱開発は、その後に恋塚左平や大瀧新田を造った草刈太一左衛門に引き継がれました。太一左衛門は浅子の仁田谷炭鉱も開発しています。

新田開発は江戸時代の初めから行われました。新しい土地を開拓して米の収穫を増やせば、それだけたくさんのお金が入るようになり、藩の財政を豊かにすることができるからです。最初は藩が直接行っていました。そうして生まれたのが早岐地区では早岐新田や宮崎新田、相浦では1655年(明暦元)に完成した川下新田です。



川下新田

その後、新田開発は個人が行うようになりました。新田を開発すると自分の土地になるため、百姓の次男や三男は分家するために小規模に新田を開発し、財力のある実業家は大規模に行っています。

石炭業で財産を貯えた草刈太一左衛門は、1857年(安政4)に相浦川河口に広がる干潟の干拓にとりかかり、8年後の1865年(慶応元)に大瀧新田を完成させました。広さは約70ヘクタール、潮受堤防の長さは約2キロメートルあります。堤防の最も奥まった所に水門があります。岩盤を削り、黒島御影石の切り石を積んだ立派なものです。

新田は、太平洋戦争前に海軍に買収されて海兵団となり、現在は自衛隊の駐屯地になっていますが、堤防と水門は当時のままに保存されています。また、水鳥の楽園になっている江楯池は、新田に水を引くために造られた溜池です。



草刈太一左衛門(明治10年撮影)

※写真提供:草刈光弥氏



大瀧新田の水門と堤防



江楯池

昔ばなし～じんねみどん～

じんねみどんの家の庭には、たいへん大きな椋の木がありました。そこにはスズメが何百羽も群れて、チュンチュンと朝から晩までうるさく鳴いていました。

ある時、とうとうがまんできなくなったじんねみどんは、

「こんちくしょう、今日こそつかまえてやるばい。」

と、納屋から太い木づちを持ってきて、スズメのとまっている椋の木を力まかせにたたきはじめました。びっくりした木はビリビリふるえ、枝の先でスズメの目をつついたのでたまりません。目つぶしをくらったスズメは、ポトポトとみんな地べたに落ちてしまいました。

落ちたスズメを今度は俵につめこもうとするけれども、なにしろ数が多すぎて入りません。そこで口ばしで足がチクチクしないように下駄をはいて押し込むと、スズメのつまった俵が二つもできたということです。

「さて、これば平戸の町に売りに行こうか。」

平戸までは近いのですが、じんねみどんは舟を持っていませんでした。そこで、

「おーい、おばば、畑から一番太が大根一本ひきぬいてきてくれない。」

「ほいきた。」

と、おばばがひいてきた太い大根の中をくりぬいて、舟をつくりました。

さて、できあがった大根舟にのり、じんねみどんは相浦から船出をしました。ところがギッチラコ、ギッチラコといっしょうけんめいこぐのですが、ぜんぜん平戸に着くようすはありません。一晩中こぎ続けているうちに、とうとう東の空が白んで朝になってしまいました。



「はて、ここはどのへんじゃろか。」

と、あたりを見まわすと、なんとまだ相浦でした。

「ありや、こりやどがんとしたとやろかい。」

よく見ると大根のひげが一本切れずに、里見の畑までつながっていました。

「おばば、ちょんぎってくんろ。」

里見のおばばがひげをきったとたん大根舟は、ピューンと進み、あっというまに平戸に着きました。一晩中こぎためていた力で舟が進み、もうこがなくてよかったです。

「ふるさと昔ばなし」

昭和63年佐世保市立図書館刊行より

じんねみどんの話は大野地区にいくつか伝わっている。この他にも「里見池で鴨を捕った話」や「猪を捕った話」があり、話の設定では、知見寺町の里見にいたお百姓となっている。

昔ばなしに登場する人だが、実在した人物のようだ。地元の松永茂雄氏によると、里見池の南側の山中にそのモデルとされる「久原甚右衛門」一族の墓がある。

この一帯は、まとまった墓があり、最も古いものは1774年(安永3)で最後が1877年(明治10)と、約100年間にわたって営まれている。3グループに分かれているところを見ると3家族の墓地のようだ。



久原甚右衛門一族の墓地

今は全く人家のない所に墓地だけがあるのは、江戸時代に行われた開拓によりかつてはこの近くに田畑があり、人が暮らしていたからだ。17世紀の後半が最も開拓が盛んだった。これは幕府や藩が新田開発を進めるために、開拓した土地の所有を認め、さらに数年は年貢を免除したからだ。そのため、農家の次男・三男などが独立するために盛んに開拓を行った。甚右衛門の一族もそうした事情から、この一帯の開拓に入ったのだろう。

ところで、なぜ昔ばなしに名を残すことになったのだろうか。話の中のじんねみどんは、多少ズッコケてはいるが明るい性格である。そして誰も思いつかないようなホラ話を聞かせて皆を笑わせるのが常であり、誰からも愛されていたようだ。あるいは、庄屋のような指導者として、皆の尊敬を集める立場にいたのかもしれない。そして、その人がしゃべる面白くおかしな話が、そのまま本人の伝説になったのではないだろうか。

コラム～伊能忠敬と相浦～

江戸時代の終わり頃、日本地図を作ったことで知られている伊能忠敬(1743～1816)は、1812年(文化9)の暮れに佐世保に来て、翌年2月まで佐世保や九十九島の測量を行っている。

そして、69歳の正月を相浦で迎えた忠敬は

七十に近き春にぞあひの浦

九十九島をいきの松原

という歌を残している。古希直前の節目を迎えた相浦は、彼にとって忘れがたい地となったのだろう。



伊能図(佐世保部分)

水道と相浦谷

1886年(明治19)に佐世保に軍港と鎮守府が置かれると、佐世保にはたくさんの方が集まるようになり、水不足が起こるようになりました。そのため海軍は相浦谷の十文野にあった農業用の溜池を改造して岡本水源地を造りました。さらに、鎮守府近くの矢岳に浄水場を建設して水を送りましたが、水源地と浄水場との高低差は146メートルもあったので、そのまま水を送ったのでは、強い水圧がかかって水道管が破裂してしまいます。

そこで、野中と塚木に水圧を下げるための「減圧井」が造られました。これらの工事は1901年(明治34)に完成しています。これにより、佐世保市民も海軍からの貴い水で水道を利用することが出来るようになりました。(第1章佐世保市街地参照)



岡本水源地



塚木減圧井

また、左右付近に相浦川を渡る水道橋も造られました。錆止めに黒い塗料を塗っていたので「黒橋」と呼ばれていました。その名残で、現在左右近くに架かる国道の橋にも「くろぼし」と刻まれています。

ところで、十文野地区では、それまで農業用に使っていた溜池が水道用に転用されたため、水田に引く水が不足して大変苦労したそうです。

その後も人口の増加に伴い水道は次々と拡張され、1908年(明治41)には山ノ田貯水池と浄水場が完成し、さらに1928年(昭和3)に柚木に転石貯水池が、1944年(昭和19)に同じく柚木に相当貯水池が海軍の手により完成しています。また、1940年(昭和15)には佐世保市専用の孤田貯水池が完成しました。

このうち、相当貯水池の建設には、太平洋戦争で捕虜となったアメリカ兵250名が動員されました。安全性を無視した突貫工事と重労働により、アメリカ兵53名、日本人14名が犠牲となりました。現在、貯水池の傍らには、亡くなった67名の霊を慰めるための慰霊碑が建てられています。



相当貯水池の慰霊碑

炭鉱と鉄道

相浦谷に初めて鉄道が通ったのは、1920年(大正9)のことでした。鉄道といっても普通の鉄道ではなく、もっと小さな¹⁰軽便鉄道でした。この鉄道は、世知原の政治家中倉万次郎(第15章世知原参照)が、正式な鉄道が出来るまでのつなぎとして提案したもので、1920年に相浦、柚木間が開通しました。

佐世保を含む北松浦地方にはたくさんの炭鉱があり、石炭の輸送が鉄道建設の大きな目的のひとつでした。

1931年(昭和6)には、小佐々の臼ノ浦港まで線路が延ばされて、ここが石炭の積出港となりました。



軽便鉄道の線路跡(下本山)

¹⁰ 線路の幅が狭く(普通の鉄道は1067mmあるが、軽便鉄道は762mmしかない)、小型でスピードも遅いが、鉄道に比べて安く簡単に建設できるため、明治時代に全国に普及した。

商港移転計画と松浦線の完成

この軽便鉄道は1936年(昭和11)に国有化され、線路の幅を広げると同時に、相浦港を経由できるようにルートを変更する工事が行なわれました。当時、海軍は軍港と商港の住み分けのため、商港を相浦に移すことを計画していました。そのためには相浦港までの鉄道を早く完成させる必要があり、優先的に工事が進められました。



相浦港

資材不足と工期短縮のため、鉄橋などは他の鉄道のものを外して持ってきています。相浦の街中を通っている鉄橋を良く見ると、一つ一つサイズやデザインが違っているのはそのためです。この工事は戦争中ということもあって、なかなか思うようには進みませんでした。そこで、陸軍の工兵部隊に手伝ってもらい、1945年(昭和20)4月によりやく開通し、¹¹国鉄松浦線が完成しました。

ところが、鉄道も開通し、相浦港への商港移転が本格化した途端に戦争が終わり、移転の必要がなくなってしまうました。そのため、商港になる予定だった相浦港には広い土地が余ってしまい、しばらくは石炭の集積や積み出しなどに使われていました。この場所には1997年(平成9)に水産市場が完成し、水産物の取引や販売が行われています。無駄になるかもしれない土地は有効に使われています。

¹¹ それまでは国鉄伊佐線(伊万里佐世保線)と呼ばれていた。

コラム～柚木地区の石橋～

佐々川流域の吉井町や世知原町は、石橋の集中域として有名だが、相浦川上流域の柚木地区にも3基の石橋があることはほとんど知られていない。

柚木地区（特に筒井町）には、世知原に良く見られる高石垣を持つ農家があり、石橋が造られるなど、世知原との共通点が多い。さらに写真の筒井町の石橋（付近では「大平石橋」と呼ばれている。）は、石材や丸石の装飾も世知原の石橋と共通している。



筒井町の石橋（大平石橋）

実は世知原と柚木との間には古い山越えの道が存在しており、かつては盛んに人が行き来していた。このような人々の交流の中で、世知原にあった「石の文化」が柚木に伝わり、人々の生活に溶け込んでいったのだろう。

地域の年表

時代	出来事
旧石器時代	約20,000年前 鳥帽子岳や板山、牟田原で盛んに狩りが行われた。
縄文時代	約17,000年前 菰田洞穴がたびたびキャンプ地として使われた。
	約12,000年前 泉福寺洞窟で最古級の土器「豆粒文土器」が作られた。
弥生時代	約8,000年前 岩下洞穴を拠点として広い範囲で狩りを行っていた。
	約7,000年前 人々は下本山岩陰を拠点に狩りや漁を行っていた。
平安時代	約2,300年前 四反田にムラができる。（四反田遺跡）
978年（天元元）	このころ武辺胤明が相浦を開拓したという伝説がある。
1100年頃	飯盛山経塚が営まれる。
鎌倉時代	
1199年（正治元）	宗家松浦氏第3代清、鎌倉に上り旧領地保全の朱印を得る。相浦はこのとき宗家松浦氏の領地。
1330年（元徳2）	相浦開拓の成就を祝い、大野村 祝原に祝詞神社創建。（伝）
室町時代	
1384年（永徳4）	松浦党一揆契諾にあいのうら鬼盛丸代、あいのうらのらは能登守超の名が出る。
1443年（嘉吉3）	宗家松浦氏松浦第13代盛が下本山の新豊寺に巨鐘を寄進。
1450年頃（宝徳2頃）	宗家松浦氏が相浦に本拠地を移す。武辺城この頃成立か。
1457年（長祿元）	盛、朝鮮との歳遣船貿易を約定する。
戦国時代	
1467年（応仁元）	盛没す、46歳。中里東漸寺に墓がある。
1490年（延徳2）	瀬戸越に教法寺建立、大智庵城もこの頃成立か。

時代	出来事
1492年(延徳4)	第14代定没す、46歳。竹辺町阿弥陀堂に墓がある。
1492年(明心元)	泉福寺観音堂に次郎左衛門が鱈口を寄進。
1498年(明応7)	第15代政、大智庵城で戦死、享年21歳。瀬戸越志賀神社に墓所がある。
1531年(享祿4)	第16親(宗金親)、相浦の旧領を回復する。
1535年(天文4)	親、飯盛城を築き移り住む。
1542年(天文11)	平戸の松浦隆信、飯盛城を攻める。
1563年(永祿6)	平戸松浦氏、再び飯盛城を攻める。松浦隆信の子九郎親を宗家松浦氏の養子にすることで和睦する。
1572年(元龜3)	相当原の戦い。平戸方が勝利して、唐船城の五郎盛(左高)は西有田に落ちる。
1574年(天正2)	第17代九郎親、家臣の東甚助時忠と刺し違えて没す。
1576年(天正4)	宗金親、大宮古社を竹辺に遷宮して大宮姫神社となす。
1577年(天正5)	宗金親没す。新田町竹林寺が墓所。
1593年(文祿2)	第18代定、朝鮮の役で戦死。墓所は相浦町金照寺。
江戸時代	
1615年(元和元)	一国一城令で飯盛城破却か?
1665年(寛文5)	川下新田完成。
1679年(延宝7)	大宮姫神社本殿再建
1812年(文化9)	伊能忠敬、佐世保地方を測量。～1813年(文化10)まで。
1846年(弘化3)	大潟で水銀採掘始まる。
1865年(慶応元)	大潟新田完成。
近代	
1875年(明治8)	賤津小学校開校。山口小学校開校。大野小学校開校。
1881年(明治14)	中里小学校、山口小学校分校から独立。
1900年(明治33)	岡本水源地完成。
1908年(明治41)	山ノ田貯水池、浄水場完成
1920年(大正9)	佐世保軽便鉄道相浦、柚木間開通。
1928年(昭和3)	転石貯水池完成。
1938年(昭和13)	相浦町を佐世保に編入。
1940年(昭和15)	菰田貯水池完成。
1942年(昭和17)	大野、中里、皆瀬村を佐世保市に編入。
1943年(昭和18)	国鉄伊佐線(伊万里佐世保線)開通。
1944年(昭和19)	相当貯水池完成。
1945年(昭和20)	国鉄松浦線開通。
現代	
1954年(昭和29)	柚木村を佐世保市に編入。
1997年(平成8)	相浦港に中央卸売市場水産市場完成。